

直接、役立つことだけではなく、 生きがいにつながる 一生物の宝をみつけてほしい

愛 知淑徳学園が創立したのは1905年。当時の女子教育は家事や裁縫が主流でした。そんななか創立者は、「十年先、二十年先に役立つ人材の育成」を掲げ、英語や理科を必須科目とし、体育を奨励するなどの革新的な実践を行いました。それから110年。これだけ変化が激しい社会になると、十年先、二十年先を予測することはなかなか困難です。また、将来から逆算して新たな学部・学科を作ろうとしても無からは何も生まれません。その点、長い歴史のなかで文科系領域に関する多様性をもつてきた本学だからこそできる地道な改革があると思っています。

本学では、文学部の国文学科・英

文学科から教員が多く誕生していますが、国語や英語を教えることができるだけではなく文学などの専門をもっています。例えば源氏物語が好きで、一生研究しながら教壇に立つ教員は、「本物」ではないでしょうか。それが、昔ながらの学科をもち続けてきた理由の一つです。そのうえで、小学校教諭などを養成するべく文学部に教育学科を加え（07年）、その3年後には、幼稚園教諭や保育士を養成するため福祉貢献学部（同学科子ども福祉専攻）を設置しました。国文学科・英文学科の実績があつての発展です。

16年度にグローバル・コミュニケーション学部を新設するのも同様です。もともと交流文化学部には英語の工

キスパートコースがありました。ビジネス学部にもグローバルビジネス専攻を作り英語で授業する動きがありました。これらが補完関係を作れば力になるという考えがベースです。このように、内側から伸びてきた芽を広げる動きが、結果として時代の要請にこたえる形になったのです。

社会の動きをにらみ、それに対応した力を育むことは大切ですが、そこに振り回されることはありません。案外、大切な物は、役に立ちそうもないところにあるものです。つらいときに還れるような核となる物を見つけることも重要です。先ほどの話ではないですが、源氏物語という一生物の宝をみつけた人は幸せなはず。歴史や音楽、クラブやボランティア活動でも構いません。大学とはそうした生きがいを探す場でもあり、そのためのしかけも数多く用意されています。

もちろん学部の柱となる専門性や、資格試験に合格する力が重要なのは言うまでもありません。そのために各学部で体制を整えています。いずれにしろ大切なのは、学生が生き生きとしていられること。卒業後、ここに来て良かったと心から思える学校でありたいと思っています。

学校法人愛知淑徳学園（愛知淑徳大学） 学園長・理事長 小林素文



【学園長・理事長プロフィール】こばやし・もとふみ●1945年生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業。アイオワ州立大学大学院言語学専攻修士課程修了。愛知淑徳短期大学英文学科講師を経て、84年愛知淑徳大学文学部教授。89年愛知淑徳大学学長（～2011年3月）、91年学校法人愛知淑徳学園理事長。

【大学プロフィール】1905年愛知淑徳女学校開校。75年愛知淑徳大学開学。95年男女共学体制に。文学部（国文学科、英文学科、教育学科）、人間情報学部、心理学部、メディアプロデュース学部（2016年度創造表現学部名称変更）、健康医療科学部（医療貢献学科、スポーツ・健康医科学科）、福祉貢献学部、交流文化学部、ビジネス学部に加え、2016年度グローバル・コミュニケーション学部を開設予定。